



TITLE:

Psilocybin実験精神病の精神病理学的研究(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

三好, 暁光

CITATION:

三好, 暁光. Psilocybin実験精神病の精神病理学的研究. 京都大学, 1965, 医学博士

ISSUE DATE:

1965-03-23

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/211438>

RIGHT:

【 79 】

氏 名	三 好 暁 光 み よし あき みつ
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 記 番 号	医 博 第 175 号
学 位 授 与 の 日 付	昭 和 40 年 3 月 23 日
学 位 授 与 の 要 件	学 位 規 則 第 5 条 第 1 項 該 当
研 究 科 ・ 専 攻	医 学 研 究 科 内 科 系 専 攻
学 位 論 文 題 目	Psilocybin 実験精神病の精神病理学的研究
論文調査委員	(主 査) 教 授 村 上 仁 教 授 前 川 孫 二 郎 教 授 三 宅 儀

論 文 内 容 の 要 旨

Psilocybin は Hallucinogen, Phantastica, Psychotica あるいは Psychodysleptica 等々の名称で呼ばれる一群の物質の一つで、これらの物質については Haschisch, Mescaline 以来多くの動物実験や人体での身体病理学的研究、または精神病理学的研究が試みられ、諸種精神病の解明と理解への一つの手がかりとされている。特に LSD 25 の発見以来、この物質が微量でも効果を発揮しうることもあって、種々の立場からの、種々の方法を用いての研究が飛躍的に増大している。

今回著者が実験を試みた Psilocybin については、我国ではまだ実験研究報告が見られないので、著者は先ず Psilocybin によって引き起される諸症状を観察記載し、その正常人での症候学を LSD 25 のそれと比較検討した。LSD 25 については我国でもかなり研究報告があり、著者の教室でもここ数年来研究がつづけられている。

両者の症候学を身体症状と精神症状に類別し比較検討したが、ともに両者略類似の症候学を示し、そこに顕著な差異は認められなかった。あえて2～3の相違点を探せば、Psilocybin に、より不快な身体症状—自律神経症状—が多い、例えば悪心、眩暈、しびれ感を示す症例は Psilocybin による例に多くみられた。一方精神症状で Vision の内容の豊富さとその持続、身体像変容の激しさと持続に着目すると、LSD25 による例が優位を占めるものが多い。これらは Hallucinogen によって惹起される精神症状の中核であり、LSD25 の方が Hallucinogen としての作用は強力であるとみられる。なお人体で Hallucinogen としての効果を発揮する薬量は LSD 25 では γ 単位であったが、Psilocybin では mg 単位であり、力価の比較は後者が前者の $1/80 \sim 1/120$ である。また身体症状、精神症状を含めて、効果の持続時間は LSD 25 が長く、投薬後効果の発現までの時間は Psilocybin が短いのが全正常実験例を通じての傾向であった。

次に正常例で Psilocybin による諸症状の段階的経過を、身体像変容を中心に観察したが、そこに三つの段階を認めることができた。すなわち 1) 身体の限界がばやけていくと感ずる段階、2) 身体の一部が喪失したと感ずる段階、3) 自我変容としての身体像変容の段階、であり、これは身体像変容以外の諸症

状も含めて体験の深さを示す一つの大きな指標である。これら段階的経過と、その身体像変容に現れる側面という点でも LSD 25 による実験と多くの共通点を有し、先の症候学的諸類似性とも合せて Psilocybin もまた LSD 25 と同じく精神療法的適用に耐えうるものと考えられる。

最後に、各被験者の体験経過、その体験内容を仔細に検討すると、それぞれ個人差を有するけれども、経過を貫く根本気分と、体験内容の移り行きの様相から、そこに或る程度の共通性の認められる群があり、正常者で四つの類型を類別し得た。すなわち 1) 不安緊張—非連続型、2) 不安緊張—円滑移行型、3) 快楽不関—非連続型、4) 快楽不関—円滑移行型の四つであり、しかも同一被験者では LSD 25 投与の場合も、Psilocybin 投与の場合も同じ類型内の体験が示された。

論文審査の結果の要旨

Psilocybin はいわゆる Hallucinogen とよばれる一群の物質の一つで、豊富な精神症状を一過性に惹起せしめるのを特徴とする薬物である。三好はこの薬物を正常人14名に与えたときの精神的身体的症状を精神病理学的に詳細に分析し、これをじゅうらいその効果がよく知られている LSD25 による正常人10名の実験的精神病と比較検討した。

まず両者の症状を身体症状と精神症状とに類別して比較するに、両者はほぼ類似の症状を呈したが、二、三の相違点をあげれば、悪心、眩暈、しびれ感などの不快な自律神経症状を示す例は Psilocybin に多く、また Vision の豊富さとその持続などの精神症状は LSD 25 の方が顕著である。なお有効薬量は Psilocybin は LSD 25 の 80~120 倍を要する。また効果の持続時間は LSD 25 の方がながく、効果発現までの時間は Psilocybin の方が短いことが認められた。

つぎに三好は本薬剤による諸症状の段階的経過を身体像変容を中心として観察し、三つの段階に分類し、またその経過の型を4類型に分類して記載し、本薬剤が LSD 25 同様精神療法的応用に適することを示した。

要するに本論文は本薬剤についての本邦最初の実験臨床的研究であり、医学博士の学位論文として価値あるものと認める。